

渡辺淳一

化身

(けしん)

下卷

集英社



化身

(けしん)
下卷

渡辺淳一

集英社

日本經濟新聞連載

一九八四・四・一～一九八五・十一・一

化身けしん
(下巻)

一九八六年 三月二五日 第一刷発行
一九八六年 四月一五日 第二刷発行

定価 九八〇円

著者 渡辺淳一わたなべ じゅんいち

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇
郵便番号 一〇一

出版部 (〇三) 二三八一二八四二
電話 販売部 (〇三) 二三〇一六七一

製作課 (〇三) 二三八一二九六四
印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取替えいたします。

日本音楽著作権協会(出)許諾番号

第八五五〇八一八―五〇一号

秋 病 峰 短 余 春 冬 秋
色 葉 雲 夜 花 愁 萌 果

化身
(下卷)
—
目
次

318 283 236 198 157 129 74 5

装 装
丁 画
三 原
村 万
淳 千
子

化身
(下卷)

秋 果

糸瓜^{へちま}のあいだから、飼犬のコロの顔が見える。

二階の書斎から庭を見下した風景だが、むろん犬にわかるわけはなく、下から秋葉を見上げて首を捻^{ひね}っている。

糸瓜はまだ大きくなりきっておらず、そのあいだにはさまったコロの顔がおかしくて笑ったが、そういつまでも暢^のんびりしているわけにいかない。

秋に入るとともに、秋葉は仕事に追われた。この忙しさのそもその原因は、去年のうちに完成するはずだった「才能論」が、予定どおりすすまず、今年の初夏までかかったことにある。

大きな仕事がほぼ半年近く遅れたために、その他の仕事も軒並みずれてしまった。

おかげで、今年の夏からはじめる予定だった、東西の「文明論」は、いまだにスタートできないでいる。

夏から秋にかけてやったのは、それ以外のエッセイや

書評のたぐいの、細かいものである。

これらを片付けないことには、大きな仕事にとりかかれなない。

評論のような仕事をしていると、ともすると、その場の小さな原稿に追われて日を過すことになりかれない。

秋葉はそれを避けるために、二年に一本は、まとめた仕事をやるように心懸けてきた。

初めのころは、それくらいは充分こなせるつもりでいたが、最近はその目標もあやしくなってきた。

もともと秋葉は、あまり仕事の早いほうではない。

なにか書き出そうとして、資料を調べているうち、一つが気にかかると、そちらに深入りして、ずるずる横道にそれてしまう。書くことより、読むことが面白くなり、気がつくと前へすすむより、むしろ退がっている。

念入りな仕事をするから、と慰めてくれる編集者もいるが、実際は気が多くて、なにか面白いものがあると、協見をする悪い癖があるからである。

だが最近仕事がとどこおってきた本当の理由は、霧子にある。

正直いって、この一年間、秋葉の最大関心事は霧子にあった。むろん、それなりのペースで仕事をやってはきたが、頭のなかにはつねに霧子のことがあった。

小さな仕事も含めて、引き受けるときには、霧子との予定を考えてから決める。

これでは満足な仕事ができるわけがない。少なくともどつしりと腰を落着けた、大きな仕事は難しい。

好きな女性がいるほうが仕事が充実する、という人もいるし、秋葉も霧子を知ったころはそう思いこんでいた。だがそれも程度問題のようである。

この秋からは、じっくりやろう。

秋葉は自分にいいきかすが、その実、このあとすぐ霧子と二人のヨーロッパ旅行が控えている。

霧子と二人といっても、今度は仕事のための旅である。東西の文明論を書くに当っての基本的な構想を練るため、ヨーロッパへ行ってくる。

旅行には堂々とした大義名分がある。

だがその裏には、霧子と初めて二人だけの海外旅行をするという楽しみが隠されている。

これからは本腰を入れて仕事をしよう、と決意した、その瞬間から、霧子がつきまといっている。

しかし今度の旅は、霧子に触発されての旅でもある。以前から行きたいとは思っていたが、何時とは決めていた。漠然としていた予定を、はつきりスケジュールに組み込ませたのは、霧子である。

年齢をとると、外国へ行くのが少しずつ億劫になってくる。行きたいと思いつながら、いまずぐ必要でもなければ、なかなか腰をあげない。

その重い腰をあげさせたのは、霧子だから、その功績を見逃すわけにはいかない。

「十月の初めに、二週間ほど行ってくる」

旅行のスケジュールも決った九月の末に、秋葉は能村に初めて話した。

「今度は、スペインを中心に廻ってこようと思っている」
「彼女も一緒だろう」

勘のいい能村はすぐ見抜いてしまった。

「彼女はまだ一度も行ったことがないんでね」

「いいご身分だ……」

「いや、仕事なんだ。彼女もいたほうが、なにかと便利かと思つてね」

弁解するが、能村は水割りのグラスを持ったまま、にやにや笑っている。

この男にだけは、下手ないいわけをしても、仕方がないようである。

「マドリッドに、気のきくガイドがいるから紹介しようか」

「女性か？」

「そうだ、もうスペインに二十年近くいて、スペインのことならなんでも知っている。美術や建築などにもくわしいし、車も運転できる。前にうちのコマーションを撮影したときに、世話にもなった」

「じゃあ、頼もうかな」

出版社の紹介で、マドリッドにいるカメラマンに会うことになっていたが、まだ三十半ばの男性だといふので、秋葉は少し迷っていた。

そんな男に、若い女性と一緒にのところを見られるのは気が重しいし、霧子と変に気が合っても困る。

「明日にでも、向こうに電話をして予定をきいてみよう

か」

能村は手帳に秋葉たちの日程をメモしてからつぶやいた。

「しかし、二人でスペインへ行くなんて、羨しいな」

「冷やかすなよ」

「いや、いつまでもお熱くて結構なことだ」

霧子の誕生日に、微妙な行き違いがあったことまでは、さすがの能村も気がつかないようである。

外国へ行く日が近付くにつれて、霧子は一種の躁状態になってきた。なにかつまらぬことにも、大袈裟に驚くし、突然けられらと笑い出す。

英語なら任せておいて下さい、といったかと思うと、次の瞬間、わたしの英語は速成ですから、とても駄目です、と急に自信がなくなる。

それでもテレビの英会話などを見て、真剣に勉強している。

初めての外国への旅ということが、霧子の気持を高ぶらせているようである。

三年前、史子と一緒にアメリカへ行ったが、そのときの史子もやや燥^はぎ気味だったが、いまの霧子から見ると、ずいぶん落着いていた。

むろん史子の場合は、それ以前に外国へ行っているせいもあるが、飛行機やホテルなど、彼女にまかせておけば、エージェントと連絡して間違いなくやってくれた。

それからみると、霧子はいささか頼りない。多少、英会話ができるとはいえ、実際はお荷物になりそうである。だが外国へ行ける喜びを全身に表わしているのを見るのは気がいい。自分では少しはおさえようとしているようだが、嬉しさがつい表に出てしまふらしい。

「秋のものと夏のものと、どちらを主に持っていたらいいかしら」

霧子の最大の関心事は服装である。行くと決ってから毎日、持っていく服のことばかり考えている。

「スペインはかなり暖かいと書いてあるけど、パリはもう秋でしょう」

秋葉もスペインは初めてなのでわからないが、十月の初めでは、パリはかなり涼しい。

「夏のをメインにして、秋のものを少し入れていったらいいだろう」

「こんなの、向こうで着たらおかしいでしょうね」

霧子は膝の下で絞ったパンツと対になっている水色のブラウスを見せる。

今年の夏、こっそり買ったらしいが、パンツの嫌いな秋葉に遠慮してか、あまり着たのを見たことがない。

「スペインではともかく、パリではあまり着ていないだろうな」

日本のファッションは、アメリカの、それもニューヨークやロサンゼルスLos Angelesの、けばけばしいところの真似をしすぎている。

たしかに流行は流行かもしれないが、それを追っているのは、都市に屯とどろするほんの一握りの、いわゆる翔んとでる人々にすぎない。

それを日本では平凡なOLまで争って着ている。

ヨーロッパはもちろんアメリカにしても、本当にセンスのいい人は、流行とは無関係に自分の個性に合ったものを、自分流に着こなしている。

そのあたりの実態も、霧子にはよく見てもらいたい。

エージェントに頼んであった日程が、最終的にできあがったのは、出発の一週間前だった。

まず北廻りでまっすぐマドリッドに入り、そこで三日間滞在したあと、バルセロナに行く。ここはガウディの建築もあり、秋葉がぜひ見たいところでもある。それか

らグラナダ、セビリアと南へ下り、最後はマジヨルカ島へ行く。

それでスペインを離れて、あとはパリに行つて三泊する。

パリは秋葉は何度も行つていて、改めて行くまでもない。単に飛行機を乗り継ぐだけだが、霧子の希望をいれて泊ることにしたのである。

「いよいよ、本当に行くんですね」

霧子はまだ信じられぬというように日程表を見ていたが、急に不思議そうな顔をした。

「これ、ツアーじゃないんですか」

「ずっと、二人だけだよ」

秋葉も初めはツアーで行くことを考えたが、旅行会社で決めた日程にそつて歩くのでは、見たいところも充分に見られない。それに若い女性と二人連れでは、他の客達の興味を惹きそうである。

「ツアーでなければ、凄く高いんでしょう」

「まあね……」

幸い秋葉の旅費は、出版社のほうで持つてくれることになったが、霧子の分はこちらで持たなければならぬ。

ヨーロッパまでは個人では往復で九十万近くかかる。

かなりの出費で迷つたが、考えているうちに次第に氣が大きくなり、結局ファーストクラスで行くことにした。二人では大変な額になるが、秋葉としては、今度の旅が、霧子との新婚旅行のつもりでもある。

おそらくこれからあと、霧子のような素敵な女性とめぐり合うことはないし、これほど氣持が燃えあがることもないだろう。

これが、自分の生涯にとつて最後の恋になるに違いない。

考えるうちに、秋葉は思いきり贅沢をしたい氣持にかられてきた。

年齢をとつて、金だけ残つても仕方がない。少し大袈

婆だが、そんな思ひが最後に決断させた。

「わたし、ツアーでもよかつたんです」

「あれはぞろぞろとみんな歩いて、氣が重いからね」

「でも……」

霧子はいかにももつたいない、という顔をしているが、その困惑した表情がまたいじらしい。

「わたし、そんなのに乗つたことありません」

「もちろん、僕も滅多に乗らない」

「どうして、そんな高いのにしたんですか」

その理由は、いま霧子に説明してもわからないし、それをいうのは、いささか怪しいところもある。

外国へ旅行する段になって、秋葉が最も気になるのは、母親のことである。

すでに七十七の喜寿を過ぎたうえに、今年は梅雨ころから持病のリウマチが悪化して、外出も思うにまかせなかった。

半月ではあるが、外国へ行っているあいだに、なにが起らないともかぎらない。

だが本人は、最近知人の占い師に「九十歳まで生きる」といわれたのに気をよくしてか、いたって元気である。

外国へ行くことを告げたら、淋しがるかと思つたが、「外国はぶっそうだから、気をつけるですよ」と、逆に注意をされる。

「スペインは、大丈夫だよ」

「でも、一人でしよう」

今度の旅行が仕事の取材のためとはいってあるが、霧子と一緒にとはむろん告げていない。

「なるだけ、皆さんと一緒に行くようにしたいらいいよ」

「向こうで、知っている人に会えるから、心配はいらない」

母には霧子と一緒に、といったほうが安心しそうだが、まだそこまでいう勇氣はない。

母に告げた翌日、祖母からきいたのか、真理子から電話がかかってきた。

「パパ、わたしも連れてって」

いきなりせきこんだようにいう。

「学校があるじゃないか」

「でも連れていってくれるなら休むわ、パパの秘書でいいでしょう」

娘達も、霧子と一緒にとは知るわけもない。

「パパ、気をつけてね」

最後に真理子は神妙にいつてから、とってつけたようにいった。

「もし死んだりすると会えないから、今度の日曜日、顔を見に行こうかな」

「おいおい、縁起の悪いことをいうなよ」

秋葉は、今年の正月、能村が外国へ出かける前に、遺書を書いていったということを思い出した。

「どこでなにが起るかわからないからね、五十になったら書いておくべきだよ」

一見豪放そうにみえて、能村は意外に細心なところが

ある。

秋葉はいま旅の途中で死んだら、と考えてみた。

妻とは離婚しているから残った財産は当然、二人の娘に分けられることになる。法律のことはよくわからないが、もしかすると別れた妻も、多少の権利はあるのかもしれない。

それはともかく、霧子にも少し分けてやりたい。いまの気持からいうと、子供に行く分くらいは残してやりたい。

そこまで考えて、霧子も一緒に行くことに気がついて、一人で苦笑した。

死ぬなら、霧子も一緒だから問題はない。

いつものことながら、外国へ行く日が近付くにつれて、秋葉は次第に億劫になってくる。

初めのころは、出発まであと何日と指折り数えているのだが、十日前から五日、そして二日と、日が迫ってくるにつれて、どうしてあんな遠くまで行くことにしたの、

これは生来の怠けぐさもあるが、長い旅行があると、その前後が忙しくて、仕事に追われるためでもある。

こんな苦勞をしてまで行く価値があるのか。計画を立

てておきながら、なにかの事情で取りやめになることを、心の片隅で願っている。

しかしそれも出かけるまでで、いったん飛び立ってしまえば、そんな迷いも吹きとんでしまう。

十月の初めの夜、秋葉は霧子と一緒に成田を発った。搭乗して、霧子と並んで坐っていると、まずパーサーが挨拶にきた。

「秋葉さまと八島さま、お二人ともマドリッドまでございますね」

パーサーは名簿でたしかめながら、秋葉と霧子を順に見る。

「アンカレッジまでお伴いたしますので、御用がございましたら、遠慮なくお申しつけ下さい」

秋葉はうなずきながら、パーサーの目が気になるが、霧子は座席のほうが気になるようである。

いろいろなじつたあとに、感心したようにつぶやく。「この椅子すごく楽だわ、ずいぶんうしろに倒れるし、

足の台もあるんですね」

「ファーストだから、それくらいはサービスしてもらわないと」

「わたし、こんなのに乗れるなんて、思ってもいけませんでした」

霧子はいつも喜びを正直に表わす。

はじめて高級レストランへ行ったときも、オーダー服を注文してやったときも、マンションを借りてやったときも、全身で表わした。

だが一度経験すると、二度目からはすっかり落着いて、もうずいぶん前から慣れているように振舞う。

この順応の早さは驚異的で、側で見ている秋葉が、呆れるほど、さまになっている。

これを若さの力というべきか、それとも天性の順応能力というべきか。

女は男に較べて、この種の順応力に秀れているようだが、霧子とはくにきわ立っているようである。

このまま、さまざまな贅沢に馴染んでいつて、果てはどうなるのか。

好んで仕向けていながら、先を考えると、秋葉は少し空恐ろしくなる。

夜の出発だというのに、成田を出るとすぐ食事がでた。飲物に続いてオードブル、そしてかなり量のあるメイ・ンディッシュである。

「やっぱりファーストクラスになると、飲物も食物もぜんぶ違うんですね」

霧子は珍しそうに一つ一つフォークでとり、眺めながら食べていく。

秋葉は食事は軽くおさえて、眠れるようにブランディをもらう。

エコノミーの方は満席らしいが、ファーストクラスは三分の一ほど空席がある。

二組ほど外人がいるが、他は日本人で、いずれも仕事でヨーロッパへ行く人々らしい。

秋葉は自分が若い女性と二人でいることに、なおこだわっていた。

ファーストクラスで女連れでいくなぞ、なに者だろうかと、思われているのではないか。

だが実際にそんな露骨な視線をあびせる人はいないし、秋葉の思い過ぎのようでもある。

食事のあと座席が暗くなり、映画がはじまって、秋葉の気持はようやく落着いた。

映画はいささか古いコメディものである。

秋葉と霧子はシートを倒し、毛布をもらって画面を見た。

題名はきいたことがあるが、秋葉には初めての映画である。

イヤホンをつけて見ていると、霧子が軽く横向きになつて軀を近づけてきた。

「眠るのか？」

「ううん、眠るなんてもったいないわ」

画面のあかりを受けて、霧子の目が笑っている。

「こんな素敵な旅行を、ありがとう」

座席は余裕があるし、背凭れも大きく、坐っているかぎり、他から見られる心配はない。

霧子が毛布の下からそろそろと手を忍ばせてくる。それを握り返してやると、霧子はそのまま指先を絡めている。

あたりは暗く、乗客は正面の映画を見ているか眠っている。ステュワーデスも、もう動くことはなく、二人のまわりは密室に近い。

画面では、部屋に肥った女主人が帰ってきて、泥棒が慌ててベランダ伝いに逃げ出す。

秋葉はいったんうしろを振り向き、誰もいないのをたしかめて、霧子の指を自分の近くへ引き寄せる。

瞬間、指先がびたりととまり、それから窺うように、

燃えている個所に触れる。

映画では、泥棒が入っていたのに気付いた女主人の顔がクローズアップされ、ベランダをのぞきこんだところで、霧子の指が小さな悪戯をはじめ。

秋葉はそれに身をまかせながら、目だけは画面を追っている。

アンカレッジに着いたのは、現地時間の午前十時であった。

霧子は空港ビルのベランダへ出て、風に髪をなびかせながら、アラスカの山々へ向かつて大きく息を吸う。

その爽やかな横顔には、途中、指先で小さな悪戯をした面影はない。

一時間半ほど休憩したあと、機は北極を越えてヨーロッパへ向かう。

例によって出発とともに、じき食事がでる。

「こんなに食べてばかりいては、肥ってしまふわ」

「じゃあ、飲んで眠るようにしたらいい」

「でも、せっかく二人だけにいるのに、もったいないでしょう」

食事のあと再び映画がはじまり、それが終ると、乗客

のほとんども眠りはじめたようである。

「もうじき、北極点を通過する」

「こんなところで落ちたら、どうなるかしら」

「ばらばらになって、なにもわからない」

秋葉は新聞に、自分の名前と霧子の名前が並んだところを想像した。

二人が連れであることを、別れた妻はもちろん、娘達も史子もわからないかもしれない。

わかるとしたら、せいぜい能村か、母くらいであろうか。

「君は若いから、まだまだやりたいことが沢山あるだろう」

「そうね、まだちょっと死にたくないな」

一緒に死にたい、という言葉を期待していたわけではないが、正直すぎる返事に、秋葉は少し戸惑う。

「北極の氷の上なら、死体はそのまま、いつまでも残るかもしれないわね」

「縁起の悪い話は、やめよう」

霧子は若いから、まだ死をロマンチックに考えるのかもしれないが、秋葉の年齢になると、気が滅入るだけである。

「でも、なんにも見えないわ」

霧子がブラインドを開けて窓を見ると、ステュワードスが近付いてきた。

「手前のほうに、白くぼうつと見えるのがオーロラです」
いわれて目を凝らすと、前方にたしかに淡く霞んで見えるふくらみがある。

そのまま二人で眺めていると、霧子がきく。

「オーロラって、なんですか」

「北極に近い大気が、なにかの関係で光るんだろう」

くわしくはわからないが、オーロラというのが、ラテン語で「夜明け」という意味であることだけは覚えてい

る。
「行こか戻ろか オーロラの下を ロシアは北国 はて

しらず……」

秋葉はふと、「さすらいの唄」の一節を思い出した。

霧子はむろん知るわけではない。

秋葉が口ずさんでいるとたずねる。

「それ、なんて歌ですか？」

「大正時代の歌で、松井須磨子という女優が、舞台上で歌ってからヒットした」

「昔の歌って、メロディがゆつたりして、すごくロマン